

アメリカの安全保障政策にみる歴史的記憶の影響と利用  
——パールハーバーの記憶を事例として——

城西国際大学国際人文学部 飯倉 章

本報告の目的は、パールハーバーの歴史的記憶がアメリカの安全保障政策に与えた影響と、政府や諸集団によるパールハーバーの記憶の利用について検討し、歴史的記憶と安全保障の関係を考察することにある。

歴史的記憶、とくに戦争をめぐる歴史的記憶は、国民国家においては公的記憶として国民を統合し国家安全保障意識を高める役割を果たす。さらに政策決定者の思想・信条体系を通して安全保障政策にも影響を与える。同時に、政府は記憶の装置を用いてシンボルとしての歴史的記憶を意図的に操作し、安全保障政策に資する環境を整えようとする。また、安全保障政策に正当性を付与するために歴史的記憶を利用することもある。ただ、シンボルの操作は「意図せざる結果」を生むこともしばしばある。歴史的記憶は常に曖昧さと可塑性を有するものであり、さらに、記憶同士が競合することになれば、「記憶の活動家」の働きにより集合的記憶が世代を超えて甦り、国家間の安全保障関係にひびを入れかねない力を持つこともある。

本報告ではまず、記憶という概念について検討する。最初に個人的記憶、集合的記憶、公的記憶といった様々なレベルの記憶を検討し、歴史・歴史認識・歴史観・歴史の教訓といった関連する用語と比較する。次いで、日本海軍の真珠湾攻撃により、急速にパールハーバーの公的記憶がそれ以前の公的記憶と連動してかたちづくられ、アメリカ人を国民として統合して戦争へと向かわせた過程や、戦後もパールハーバーの記憶がアメリカの冷戦戦略といった安全保障戦略の形成に際してレトリックとして利用されたり、政策決定における情報利用の問題への示唆に富む教訓と考えられたり、さらには日本との同盟関係を強める比喩ともなったことを論じる。また、戦後数十年を経てパールハーバーは、第二次世界大戦の「もっとも偉大な世代」を記念・顕彰するためのいわば記憶の場として機能するようになり、兵士の記念・顕彰という国家安全保障において重要な役割を担うようになった。一方で、パールハーバーをめぐるのは、様々な集団によって集合的記憶がかたちづくられ、それらは競合することにもなった。たとえばフランクリン・ローズヴェルト大統領の裏口参戦論などは、現地の司令官の名誉回復の問題ともからみ、公的記憶と競合するようになった。また、日米関係では謝罪論争を含む「記憶をめぐる摩擦」が表面化したこともあった。2001年、パールハーバーの記憶は、意味付けを変えてアメリカ社会に甦った。まずはその夏に、映画『パール・ハーバー』が誇大宣伝を伴って公開され、それに9.11事件が続いた。9.11を第二のパールハーバーと捉える比喩は巷にあふれ、パールハーバーの記憶は、アメリカ社会で再び安全保障の文脈で語られる比喩やレトリックの供給源となったのである。

\*本報告の内容は、拙訳著、エミリー・S.ローゼンバーグ『アメリカは忘れない』（法政大学出版局、2007年）に負うところ大であることを付記しておく。